

豊かな感性を育む物語文の学習

—第1学年「くじらぐも」の実践を通して—

羽 場 邦 子

1 楽しく読む

1年生に入学して、時間割により学習を行うのは、初めての経験である。入門期には、「こんなべんきょうがあるよ」「こうやってべんきょうすると、よくわかるね」と、教師から学習内容や学習方法を子どもたちに提示して学習を進めることが多い。これらの学習経験をもとに、子どもたちは、「こんなべんきょうをするんだな」「こんなことをしてみたいな」「こんなこともできそうだな」等、自分の思いや考えを持ち、学習に向かうようになる。1年生の子どもたちが、言葉を獲得し、言語活動により、楽しく学習するにはどのような方法が考えられるだろうか。ここでは、物語教材について考えてみたい。

平成元年の「小学校指導書—国語科—」には、「児童は、童話や物語を読むとき、話の筋の展開や場面ごとの登場人物、場面の様子などを想像しながら読むことに興味や関心を示すので、上記のような指導をした上で、楽しく読み取らせたい。」(第1学年)と書かれている。¹⁾「楽しむ」という言葉は《①たのしく思う。心が満ち足りて安らぐ。②豊かに富む。》(「広辞苑」と記述されている。楽しさは、表面的なおもしろさではなく自分の内面から発する欲求が実現したときに感じるものである。登場人物、場面の様子を想像しながら楽しく読むことは、自分の気づきや感じたことをイメージ化しながら、お話の世界を楽しむことである。これを実現させるためには、子どもたちにとって受け身ではなく、自らが進んで学習できる活動内容や方法を展開する必要がある。

1年生の子どもたちは、「先生、お話を読んで」とよく言う。時間を見つけては、読み聞かせをする。目を閉じて聞く子。楽しい場面で笑う子。つぶやく子。「おはなしをきく」ことは、どの子も好きである。読んだ本を教室に置くと、必ず、読んだ本を多くの子が手に取って、ページをめくっている。耳から聞いたストーリーを、もう一度、楽しみたいと思っているのであろうか。これまでの文学教材の学習で、子どもたちは、「げきをしたい」とか「本読み(音読)をしたい」とよく言う。登場人物になってせりふを言ったり動作をしたり、音読で話の筋を展開したりすることを楽しむ。これらの過程で、話の筋や場面の様子、人物の気持ちを理解していくことも多い。ここにみられる子どもたちは、「冷たく」分析して説明することができても、「温かく」同化して自己表現することができない²⁾というのではなく、「温かく」同化して表現したいと願うものである。

4月から、音読、動作化、吹き出し、視写、感想(手紙文を含む)等の活動を組み入れてきた。子どもの実態から考えて、場面の様子や人物の気持ちなどを想像しながら読むためには、音読、動作化、吹き出し等、体を使っての登場人物に同化できる活動が有効であると考えられる。これらの活動を学習場面で子どもたちに明確にすることで、学習に興味や関心をもち、意欲的に取り組むと思われる。また、活動に対して具体的なめあてをもつことで、無意識の活動から意識化された活動へと変容し、活動しながら自己評価していくものと考えられる。

ここでは、「楽しく読む」→「人物に同化しながら読む」ことを中心に、1年生も子どもたちとくじらぐもとの交流を描いた「くじらぐも」の実践を述べる。

2 研究の計画

(1) 研究仮説

動きを伴う音声化を取り入れるならば、子どもたちは、登場人物により同化して場面の様子や人物の気持ちを想像し、楽しく豊かに読むであろう。

(2) 具体的方策と支援活動 (※)

① 単元全体の計画を立て、具体的な活動の見通しをもたせる。

※ 一次感想をもとに、学習計画や各場面の活動内容を板書により提示し、見通しを持つことができるようにする。学習計画を教室掲示する。

② 発問を工夫する。

※ 「どのように言ったかな」「どんなにしたかな」等の発問により、子どもの気づきや感じ方を引き出す。

③ 二人、グループ、全体での活動を行う場や発表の場を設ける。

※ 多様な活動形態を設け、子どもたちで考えあったり表現しあったりする中で、子どもの気づきや感じ方を引き出す。

④ 応答的評価を行う。

3 実践の概要 —こえにだしてよもう—「くじらぐも」(光村図書1年)

(1) 単元について

本単元は、空に現れた雲のくじらと子どもたちが、いっしょに体操をしたり空を泳ぎ回ったりする話である。対比や繰り返しの表現によって、子どもたちとくじらぐもの心の交流が描かれ、空想と現実の間に想像の世界を広げることができる。また、登場人物が子どもたちと同じ1年生であることから、お話の中の子どもたちと一体となってくじらぐもに飛び乗り、ともに空を泳いで読む楽しさを味わうことができる。

(2) 指導目標

① 場面の様子や人物の気持ちを、はっきりした声で音読したり動作化したりすることができる。

② 場面の様子や人物の気持ちを想像し、お話を読む楽しさを味わうことができる。

(3) 指導内容と計画 …………… 全14時間 (本時 第二次 第4時)

第一次 お話を聞いて、感想をもつ。全文を音読し、あらすじをつかむ。…………… 2時間

第二次 場面ごとに、場面の様子や登場人物の気持ちを想像する。…………… 9時間 (本時 第4時)

第三次 グループごとに、好きな場面を音読や動作化により発表する。…………… 2時間

第四次 手紙文や続き話、感想文を選択して書き、まとめる。…………… 1時間

(4) 第一次感想より

① 読み聞かせ

読む前に、「目を閉じて頭の中に絵を描いてもいいよ」「聞きながらお話をしたくなったら、心の中でお話をしようね」と言葉かけをした。目を閉じる子、挿絵を見る子、静かに聞いた。

② 「お話を聞いて思ったこと」と「勉強したいこと」の記述 (プリントによる)

— お話を聞いて思ったこと —

くじらぐもにのりたい 20名	東雲小学校にもきてほしい 2名
まねが楽しい 14名	ジャンプが天までとどくのが楽しい 3名
空の上で歌うのが楽しい 3名	くじらぐもによりそって 3名

— 勉強したいこと —

くじらぐもにのってべんきょうしたい	くじらぐもといっしょになってよみたい
たのしくできるほんよみがしたい	「」をよみたい
リレーよみやグループよみがしたい	
げきやほんよみはっぴょうかいをしたい	くじらぐもがどんなきもちなのかかきたい
おはなしのつづきをかきたい等	

(5) 授業設計の焦点

くじらぐもに飛び乗ろうとする子どもたちの様子や気持ちは、会話文や何度もジャンプした行動に表されている。これらを読むためには、会話文の音読や動作化が有効であると考えた。「どのように言ったかな。」「どんなにジャンプしたかな。」と問いながら、子どもたちが気づいたり感じたりしたことを言葉や体で表現し、登場人物に同化して読み取ることができるようにした。音読は会話文を中心に行い、動作化では、二人で、グループで、みんなでの形態を取り入れた。友達の発表から、互いのよさや工夫を認め合える学習の場にしたいと考えた。

(6) 本時の目標 (第二次 第4時)

くじら雲に飛び乗ろうとする子どもたちと応援するくじら雲の様子を想像し音読したり動作化をしたりできる。

(7) 学習の展開

前時の学習	体操をするこどもたちとまねをするくじらぐもの様子を、音読したり動作化したりする。
学習過程と教師の指導・支援	学習活動
《めあてをもつ場》	
T1 (前時のハートマークを提示) 今日の場面の終わりにハートマークはどうなるかな。3場面を思い出して音読しましょう。	C 指名読み (子どもたち、くじらぐも、地の文にわかれて、3名)
T2 子どもたちとくじら雲の楽しい声が聞こえてきましたね。	
T3 今日、勉強する所は。 くじらに飛び乗ろうとする子どもたちと応援するくじら雲の様子を読みましょう。子どもたちやくじら雲になって「」を言ったり動いたりしましょうね。(めあてカードを提示)	C みんながジャンプする所。等 (自由に発言) C (カードを見ながら、それぞれ読む。)
《めあてを追求する場》	
T4 子どもたちやくじら雲がどんなことをしたか考えながら一人読みをしましょう。	C 一人読み
T5 子どもたち、くじら雲、地の文にわけて読みましょう。読んでみたい人。	C 指名読み (子どもたち、くじらぐも、地の文にわかれて、3名)
T6 3人でじょうずにつないで読みましたね。子どもたちやくじら雲がどんなことをしたかが分かる所に線を引きましょう。思ったことを書いてもよいですよ。	C (線を引く。) 会話文に線を引いている子どもが多い。
T7 みんな、じっくり考えて線を引いていましたね。発表しましょう。(発言を聞きながら板書でまとめる)	C1 男の子も女の子がくじらぐもに飛び乗ろうという気持ちになっていた。 C2 「男の子も女の子もはりきりました」の所です。
T8 どこで分かったの。	
T9 飛び乗ろうという気持ちになっているの。	C3 みんなは手をつないでまるいわになるとジャンプした。
T10 手をつないだの。いっしょにいけるね。	C4 「天までとどけ。一、二、三。」で天までとどきそう。 C5 「天までとどけ。一、二、三。」でみんなではりきっている。 C6 最初三十センチで、こんど五十センチジャンプした。最初の天までとどけで、くじらはがんばってって応援している。「もっとたかく。もっとたかく。」でこんどは、たかくとぼうと思った。
T11 そうか。くじらが応援したからだんだん高くジャンプしたんだね。(「天まで・・・」のカード3枚を少しずつ高く提示し直した。) くじらの言った言葉のカードは (黒板の) どこにはればいいのか。	C7 くじらが応援した。「もっとたかく。もっとたかく。」は、来てほしいから応援している。 C 「天まで・・・」の後。2回言ったよ。(自由に) C8 「男の子も女の子もはりきりました」の所で、くじらが「ここへおいでよう」と言ったからはりきったと思う。「ジャンプしました」の所は、くじらが親切にしてくれたから、みんなが心一つにしてくじらにとびのろうという気持ちで元気にジャンプした。 C9 だんだん高くとべたから「天までとどけ、一、二、三。」の所をだんだん大きな声で読んだらよいと思います。
T12 くじらがここへおいでようとさそったからは	

<p>てくれたからジャンプもだんだん高くなったんだ。今、Kさんがだんだん声を大きくして読んだらいいと発表しました。みんなはどう思う。</p> <p>Kさんは、よいことに気がつきましたね。</p> <p>T13 HさんとKさんが「」の所を工夫したらよいという発表がありました。これから子どもたちになって「」を読んでみようと思います。どうですか。</p> <p>T14 はりきって「よしきた・・・」を自分だったらどう言うかな。やってみましょう。</p> <p>T15 読んでみたい人。(一人一人に評価の言葉)</p> <p>T16 速めに読むとはりきった気持ちがよくわかるね。みんなも速めに読んでみよう。</p> <p>T17 「天までとどけ・・・」もやってみましょう。</p> <p>T18 読んでみたい人。(一人一人に評価の言葉)</p> <p>T19 どんなにジャンプしたかな。やってみようか。</p> <p>T20 ジャンプしながら言っているのを聞いて気がついたんだけど、点の所はどうだった。(カードを指して)</p> <p>T19 ところで、くじらさんはどうしてる。くじらさんもいっしょにやってみよう。どうやってやりますか。</p> <p>T20 くじらさんの所へとどきそうですね。今日のハートマークはどうなったかな。</p>	<p>C いいと思います。</p> <p>C10 「よしきた」の所は、すごくはりきって元気よくよし今からやろうという気持ちでいるから少し大きな声で読んだらいいと思います。</p> <p>C11 いいです。</p> <p>C 一人読み</p> <p>C 指名読み 4名(友達の読みを聞いて) -とびのれそうだった。-大きな声でよしやるぞとはりきっていた。-とびのろうの「ろう」がよかった。-速めに読んでいてよかった。</p> <p>C 一人読み</p> <p>C 一人読み</p> <p>C 指名読み 4名(友達の読みを聞いて)</p> <p>C 一人で、グループで、みんなで動作化、音声化</p> <p>C12 だんだんゆっくりになっていた。</p> <p>C 「もっとたかく・・・」と応援してる。</p> <p>C ふたりでやりたい。二人組みで動作化、音声化</p> <p>C 大きくなった。</p>
<p>《振り返る場》</p> <p>T21 今日の場面を思い浮かべましょう。読みたい人。</p> <p>T22 振り返りカードに書きましょう。</p>	<p>C 指名読み(「」, 地の文に分けて, 3名)</p> <p>C (カードにより自己評価をする。)</p>

次時の学習 空を泳ぐくじら雲と子どもたちの様子を、音読したり吹き出しに書いたりする。

4 考 察

(1) めあてをもつ場

① ハートマークの活用

本單元では、くじら雲と子どもたちとの気持ちを考える方法としてハートマークを利用した。「今日のハートマークはどうなるかな」と思うことは、めあて意識をもつ有効な手だてになった。

② 活動内容の確認

学習のめあては、一次感想と教師のねらいをあわせて子どもたちに提示した。その際、活動内容も子どもたちに話しながら学習の見通しをもつことができるようにした。本時では、会話文と動作化についてめあて確認時に触れた。このことで、めあて意識をもち、C9, 10の発言を促したと考えられる。

(2) めあてを追求する場

ここでは、音読と動作化をしながら、子どもたちがどのようにめあてに向かったかを述べたい。

① 線を引く

T6 「子どもたちやくじら雲がどんなことをしたかが分かる所に線を引きましょう。思ったことを書いてもいいですよ。」の指示で、線引きをさせた。子どもたちやくじら雲の会話文に線を引く子どもが多かった。子どもが、会話文に着目していることが分かった。



② 線を引いた後の発表

会話文のカードを準備し、発表を聞きながら板書にまとめた。

- C1…「はりきりました」に着目し、子どもたちの気持ちについて発言する。
C3…「手をつないでまるいわになると・・・ジャンプしました」に着目する。
C4・5…「天までとどけ。一、二、三。」に着目し、(天までとどきそう)(みんなではりきっている)と気持ちについて発言する。

これらは、子どもたちのしたことから気持ちを考えている。

- C6…最初でジャンプくじらぐもが応援したからもっと高くとぼうと思った。
C7…「もっとたかく・・・」はっきてほしいから応援した。
C8…前時のくじら「ここへおいでよう」から「はりきりました」「ジャンプしました」まで、くじらの気持ちに子どもたちが応えたと発言する。

くじらと子どもたちの気持ちが、会話文の呼応によって表れていると気づいた発言である。そこで、「天までとどけ。一、二、三。」のカードを少しずつ高くして、ジャンプが高くなったことを視覚的に提示した。また、くじら雲「もっとたかく。もっとたかく。」のカードを貼付して、くじらと子どもたちの気持ちがつながり高まっていることを黒板で示した。

- C9…だんだん高くとべたから「天までとどけ。一、二、三。」をだんだん大きな声で読んだらいい。
C10…「よしきた」をはりきってよしやろうという気持ちでいるから少し大きな声でよんだらいい。

C9は、ジャンプの様子から音読の工夫に気づいたものものである。C10は、気持ちから音読を考えている。この2つの発言を手がかりに、「これから子どもたちになって「」を読んでみよう」(T13)と言葉かけをした。

③ 音読の工夫と動作化

ア「よしきた。くものくじらにとびのろう。」

一人読みや友達の音読を聞き合う中で、

- 「よしきた」を少し大きく読む。
 - 速めに読む。
 - 「とびのろう」の「ろう」を強く読む
- 等の工夫がみられた。

イ「天までとどけ。一、二、三。」

始めは、音読だけを行い、次にジャンプの動作化をしながら音声化を行った。動作化を入れての音声化により、

- だんだん大きく読む。
 - だんだんゆっくり読む。
 - 読点の間を考える。
- 等に気づいていった。

ウくじらと子どもたちの呼応

ア、イで気づいたことをグループやみんなで動作化を行った。②での発表についても体を使っての活動により、一人一人が確かなものにしたと考えられる。その後、くじらの会話文を入れての動作化を二人組で行った。椅子に上がって泳いだり、ジャンプしたりして活動した。登場人物により同化してくじらに飛び乗ろうとする子どもたちの様子を想像できたと考える。



